

# 中晚唐期へ閑吟∨覚え書き

岡田充博

## I

昨年私は、中晚唐期の詩作品に見える「苦吟」という言葉について、簡単なメモ程度のもを纏めてみた（「中晚唐期へ苦吟∨覚え書き」名古屋大学中国語学文学論集・第二輯）。ところでその際、終始気にかかりながらも、結局触れることの出来なかつた事柄に、この時期の詩作品における「閑吟（閒吟）」という詩語の頻出現象がある。

「苦吟」という詩語の頻出現象の背後にある文学思潮を「苦吟∨的風潮」と呼ぶならば、この「閑吟」の頻出現象の背後には、「閑吟∨的風潮」とでも名付けるべき流れがあるのではないかと、そう考えながらも、その時の私には、「苦吟」という言葉の意味内容を検討してみるのが精一杯であり、「閑吟」にまで手を伸ばす余裕はまったく無かつた。そこで止むなく、論点を「苦吟∨のみに絞つて纏め上げてみた試みであるが、以後、中晚唐詩について考えるたむごとしに、割愛した「閑吟」および「閑吟∨的風潮」の重要性が増大してくるように思われる。

ここに「中晚唐期へ閑吟∨覚え書き」と題して短い一文を草するのは、この重要な意味を持つと考えられる「閑吟」について、あらましの輪郭とポイントを押え、今後の考察の下準備として

おきたい為である。

なお、方法的には前回の「へ苦吟✓覚え書き」と同様な形を取り、「閑吟」という言葉の意味内容・使用状況等についての検討を中心に掘えることにしたい。

## II

最初に、「閑吟」の意味内容とその歴史について概観しておこう。  
辞書の解説に見える「閑吟」の意味内容は、おおよそ次のようなものである。

「閑吟…しづかに詩や歌を口ずさむ。間吟。」

「間吟…しづかに詩を吟ずる。閑吟。」

(諸橋轍次『大漢和辭典』)

「閑吟…しづかに詩や歌を口ずさむこと。間吟。」

「間吟…しづかに詩をつくること。閑吟。」

(小柳司氣太『新修漢和文字典』)

「閑吟…詩歌など静かに口ずさむ。」

(小川環樹他『角川新字源』)

「閑吟…閑暇吟哦也。」

「間吟…閑吟也。」

(『中文大辭典』)

なお、『辭源』、『辭海』、『辭通』、『聯珠辭典』といった中国の辞書には、「閑吟」「間吟」の項目がない。

右に挙げた日本の辞書はすべて、「閑」字を「しずか」の意味に取っている。しかし、白居易の詩に見える次の様なコンテキストの中での使用例から推し測っても、そこには、『中文大辭典』に言う「閑暇(へのどか、ひま、余裕がある)」の意味が、当然加えられてよいであろう。

### 食飽

白居易

食飽拂枕臥、睡足起閑吟。淺酌一杯酒、緩彈數弄琴。既可暢情性、亦足傲光陰、誰知利名<sup>一作</sup>盡、無復長安心。

また、「吟」字が「詩歌を口ずさむ」、「詩歌をつくる」の両様の意味を含み持つことは言うまでもない。

「閑吟」の意味内容は、おおよそ以上の説明に尽きると言って良く、この点、「苦吟」という言葉に較べて意味の把握が容易である。

次に使用状況について眺めておくと、詩作品に限って言えば、その使用例は、先にも述べたように中晩唐期以降に集中的にあらわれる。左にそのうちの幾つかを抜き書きしておくことにする

が、一つだけ付言しておきたいのは、こうした使用例の背後にしばしば窺われる、「閑吟」と隠逸的・脱俗的な価値意識（ないしは閑適的な価値意識）との結びつきである。「閑」字は、どこか・ひま ⇕ 官事に携わっていない・隠逸的生活々といった意味上の連想作用を持ち得、こうした価値意識と極めて結びつき易い性格を持っている。たちいった検討を行なうだけの準備が今の私にはないが、ただ、中晩唐詩における「閑吟」の頻用現象を解明する鍵は、恐らくこの辺にもあると見て良いのではなからうか。

林下無拘束、閑吟放性靈、

（張籍「和左司元郎中秋居十首・其九」）

盡日無來客、閑吟感所懷、

（同「和李僕射雨中寄盧巖二給事」）

舊房到日閑吟後、林下還登說法臺、

（同「送禧亭山寺僧」）

閑吟聲未已、幽玩心難足、

（白居易「題小橋前新竹招客」）

唯有詩魔降未得、每逢風月一閑吟、

（同「閑吟」）

獨酌無多興、閑吟有所思、

（同「小歲日對酒吟錢湖州所寄詩」）

霜月靜幽居、閑吟夢覺初、

(姚合「秋夜寄默上人」)

寒日南宮晚、閑吟半醉歸、

(同「和戸部侍郎省中晚歸」)

秋山春雨聞吟處、倚徧江南寺寺樓、

(杜牧「念昔游」)

閒吟芍藥詩、悵望久嚙眉、

(同「舊游」)

ただ、中晚唐期以前にも例が全くない訳ではなく、たとえば盛唐期には、李白の詩に次のようなものがある。

閑吟歩竹石、精義忘朝昏、

(李白「贈宣城趙太守悦」)

獨酌勸孤影、閑歌面芳林、

(同「獨酌」)

「獨酌」詩に見える「閑歌」は、内容的には「閑吟」と大差ないであろう。

この様に杵を広げて、「閑吟」と類似した詩語、さらには詩歌と「閑」との結びつきを拾ってゆけば、盛唐期の自然詩人王維・孟浩然、さらに溯って東晉の陶淵明、西晉の陸機あたりまで行きつくことができる。

時吟。招隱詩。或制閑居賦。

(王維「丁寓田家有贈」)

靜。中何所得。吟詠也徒哉。

(孟浩然「本闈黎新亭作」)

壺酒明情洽。琴歌野興閑。

(同「遊鳳林寺西籟」)

童冠齊業。閒詠以歸。我愛其靜。寤寐交揮。

(陶淵明「時運」)

斂襟獨閒謔。緬焉起深情。搏遲固多娛。淹留豈無成。

(同「九日閒居」)

但恨功名薄。竹帛無所宣。迨及歲未暮。長歌承我閑。

(陸機「長歌行」)

(なお、『大漢和辭典』は「閒吟」の用例として、『後漢書』申屠蟠傳の一節を「游人間吟」の形で引くが、これは誤り。この部分は、「今先生處平壤。游人間吟。典籍。襲衣裳」

…と読まれるべきである。)

殊に、陶淵明の「九日閒居」詩に見える「閒謔」には注目したい。ここにはすでに、後の中晩唐期の使用例とはば重なり合う意味内容、さらには、その背後にこめられた隠逸的・閑適的な価値意識の存在が窺われる。

以上の考察から、私達は「閑吟」という詩語を、次のように捉えることができる。すなわち、

「閑吟」は、表にあらわせば次の様な意味範囲において使用されている。

閑  
(一) …しずか。

(二) …のどか・ひま。

吟  
(一) …歌う。

(二) …詩歌を作る。

その場合、「閑」字にはしばしば隠逸的・閑適的な価値意識がこめられるが、ところで、これとはほぼ同一内容の「閒謔」という詩語がすでに陶淵明の作品に見られる。ここから判断して、「閑吟」という言葉は、おそらくその成立当初からすでに中晩唐期以降の使用例とはば等しい意味範囲を持つ、固定的な言葉であったと考えられる。(この点、「苦吟」という言葉がかなり大きな意味の変動をその成立史のうちに抱えているとは異なる。ただ、固定的とは言っても、この言葉に通時的な変化が全くなかった訳ではなからう。「閑」字にこめ

られる自覚的な価値意識の深化。「吟」字の意味内容中における詩作行為の比重の増大、等の変化は当然あったと考えられるべきであろう。)

また、この言葉は、中晩唐期以降の詩作品に至って急に頻見されるようになるが、こうした現象は「苦吟」の場合と同様、それを支える詩人達の様々な価値意識・美意識等を考慮に入れつつ、今後多角的な検討を加えてゆく必要がある。

中晩唐期以降の詩作品における「閑吟」の頻出現象については、現在の私には十分な分析能力がない。ここではただ、(一)…それが、先にも触れたように、隠逸的・閑適的価値意識と深く結びつく面を持っていること、(二)…またそれは、当時、詩文学が単に高揚した感情を吐露する手段としてのみではなく、深い精神性・内的価値と関わるものとして、いわば内向的な方向において認識されつつあったことを示す様に思われること、の二点を断片的に指摘するに止めて、今後の課題としたい。

なお、この章を結ぶにあたって是非とも言及しておかねばならないのは、晩唐期における一寸変わった「閑吟」の使用法として、次のような例が見られるという点である。

### 閑吟

陸龜蒙

閑吟料得三更盡、始把孤燈背竹窗、一夜西風高浪起、不教歸夢過寒江。



夜吟

李山甫

除却閑吟外、人間事事慵、更深成一句、月冷上孤峯、竊理多瞑目、含毫靜倚松、終篇渾不寢、危坐到晨鐘。

ここに歌われている「閑吟」は、その内容から言えば、「苦吟」と書き換えられてもおかしくない。現に、同時代の詩人達の「苦吟」を歌う作品のうちには、次の様な類似した詩句も見られるのである。

吟盡三更未著題、竹風松雨共淒淒、……………

(杜荀鶴「秋夜苦吟」)

萬事不關心、終朝但苦吟、……………

(許棠「言懷」)

「苦吟」の一般的な意味内容(「苦心して詩歌を作る」とは本来対照的な性格を持つ筈の「閑吟」という言葉が、右の様な、むしろ「苦吟」という表現を使った方がびったりする場合にも用いられるようになったのは、何故であろうか。また、この現象を私達はどのように捉えたらよいのであろうか。次にこの点について考えておくことにしよう。

前章にあげた「閑吟」の「苦吟」的使用法とでも言うべき用例をめぐって、第一に考えられるのは、当然、中晩唐期の「苦吟」的風潮との間の相互影響という点であろう。

当時の「苦吟」的風潮が、「閑吟」という言葉のそうした新しい使用例と何らかの関わり合いを持つことは、ほとんど疑う余地がない。ただ、そのことを漠然と指摘しただけでは、この現象が含み持つ意味を掘り上げることが出来ない。私達はこの点について、もう少し踏み込んだ検討を試みてみる必要がある。

先ず最初に確認しておきたいのは、「苦吟」「閑吟」という言葉が共有する、意味内容上の共通性・融合性である。

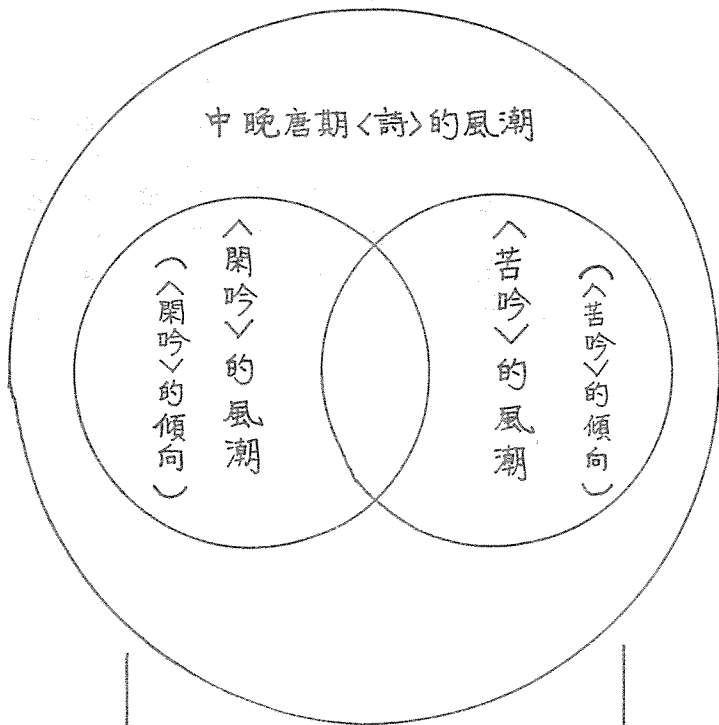
「閑吟」という言葉が、前掲のような「苦吟」と類似した用いられ方をする以上、一見対照的なこれらの詩語も、お互いに相容れない正反対の性格のものではあり得ない。この二つの言葉を支えるそれぞれの文学意識ないしは文学的自覚のうちには、何らかの共通点・融合点がある。たゞたゞと考へねばならないことになる。では、その共通点・融合点とは何であろうか。結論から言えばそれは、両者が共に「吟（詩歌をうたう。作る。）」という行為に心を傾けている点に求められよう。つまり、この詩作に対する傾注の姿勢において両者は共通点を持ち、そこに「閑吟」が「苦吟」的な内容において使用される余地も生じてくるのである。

このような「苦吟」と「閑吟」との共通性・融合性は、さらに、前稿「中晩唐期「苦吟」的風潮の考察」の一一七頁・一三八～九頁・一四四～五頁に指摘しておいた、「苦吟」の使用例中における

る一種の「閑吟」的な傾向へ——「苦吟」という言葉が、現実的な憂苦、詩作上の勞苦、といった意味要素を伴わず、單なる吟詠・詩作への没頭、といった意味内容に近づく場合——の存在と合わせ考へるならば、一層明瞭なものとなつてくる。そして、こうした共通性が兩者の間に見出される以上、私達は、これらの言葉の詩作品への頻出を背後から支えているそれぞれの文學思潮に關しても、同様に共通性の存在を認めなければならぬのである。

今、「苦吟」という詩語の頻出現象の背後にある思潮を「苦吟」的風潮、「閑吟」の背後にあるそれを「閑吟」的風潮と名付け、それぞれが持つ性向を「苦吟」的傾向、「閑吟」的傾向と呼ぶとすれば、兩者は、左図の様な重なり合う二つの円の形において示すことができよう。そして、この二つの思潮が持つ、詩作への傾注の姿勢」という共通項をもとにして、さらに兩者を統合してみるならば、そこには、二つの円を内に包みこむ、中晩唐期へ詩」的風潮」とでも呼称すべき大円を仮設することが可能であろう。(この「中晩唐期へ詩」的風潮」とは、私がここで仮に想定してみた概念であつて、勿論また嚴密な内容規定を備えている訳ではない。ただ、現象的な面から一応の定義を下しておくならば、それは、「中晩唐期の詩作品に「苦吟」「閑吟」といった詩語の頻出現象をもたらし、詩文學に対する何らかの高い価値意識と傾注的姿勢を持つ風潮」ということにならう。)

中晚唐期〈詩〉的風潮



「閑吟」

- ・ 平靜さ
- ・ のどかさ
- ・ ひま、余裕

「苦吟」

- ・ 現實的な憂苦
- ・ 詩作上の勞苦
- ・ 詩作へのモノマニアックな耽溺
- ・ 心理的な切迫感・屈折感

図の下に付け加えてあるのは、「苦吟」「閑吟」という詩語が、詩人によって選択される場合のおおよそその基準である。つまり、或る詩作行為が、憂苦・勞苦・モノマニアックな耽溺等の方向において捉えられた場合には、それは「苦吟」としてあらわされることになる。逆に、詩作行為が余裕を持った態度・平靜さ・のどかさといった方向において捉えられた場合には、それは、

「閑吟」としてあらわされることになる訳である。従つて、矢印の中央部を点線にすることによつて示したように、實質的にはほとんど同一の詩作行為が、詩人のその際の心理状態・作品制作上の意図等の影響下において、時には「苦吟」となり時には「閑吟」となる場合も、当然起り得ることになる。

以上の考察によつて私は、「苦吟」と「閑吟」という一見対照的な詩語の持つ共通性を確認し、さらにそこから、へ苦吟∨的傾向とへ閑吟∨的傾向の持つ共通性、両者を包括する概念である「へ詩∨的傾向」の仮設といった地点にまで考え及んでみた。こうした私の推測は、(一)へ苦吟∨とへ閑吟∨がほぼ時を同じくして詩作品中に顕在化してくること、(二)また、両者が共に隠逸的・脱俗的価値意識との結びつきを持つこと(へ苦吟∨と隠逸的・脱俗的価値意識との結びつきについては、前稿「中晩唐期へ苦吟∨覚え書き」一五二と五頁を参照されたい。)等の点と考え合わせるでも、全く的外れなものではないと思う。ただ、ここからさらに詳細な検討へと進んでゆく為には、時間をかけた準備が今後必要であり、現在の私の能力では、右のような大まかな問題提起の段階に止まらざるを得ない。しかしいずれにせよ、「閑吟」の「苦吟」的な意味内容での使用例は、へ閑吟∨へ苦吟∨という中晩唐詩に見えるこの二つの風潮が、全く別個のものとしてそれぞれ単独に扱われるべきではないということ、先ず私達に明示してくれると言つて良いであらう。

さて、以上のように互いに共通・融合する側面を持つとはいへ、「苦吟」と「閑吟」、あるいはへ苦吟∨的風潮とへ閑吟∨的風潮とは、反面、互いに異なる性格をも当然有していなければな

らない苦である。そこで次に、その相違点について注目してみることにしよう。

先にも述べたように、陸龜蒙の「閑吟」詩・李山甫の「夜吟」詩に歌われているのは、むしろ「苦吟」と表現されるに相応しい詩作行為のように思われる。しかしそれにも拘わらず、「苦吟」に代わって「閑吟」という詩語が選抜されているのは、一体どのような理由によるものであろうか。

また、この他に似た様な例をあげるとすれば、鄭谷の「輦下冬暮詠懷」と題する詩がある。この作品は、初稿と完成稿とが共に現存する珍しいものであるが、両者を比較してみると、初稿の「苦吟」が完成稿では「閑吟」に改められている。

### 〔初稿〕

覓句千名祇自勞、苦吟殊未補風騷、煙開水國花期近、雪滿長安酒價高、…………

### 〔完成稿〕

永巷閒吟一徑蒿、輕肥大笑事風騷、煙含紫禁花期近、雪滿長安酒價高、…………

ここに見られる「苦吟」から「閑吟」への書き換えは、どのような理由によるものであろうか。

理由は、大きく分けて二つ考えられよう。すなわち、

(一) ……そこに歌われる詩作行為への没頭が、格別「勞苦」「憂苦」等の要素を伴わず、「閑吟」にも置き換え可能な性格のものであった為。

(二) ……詩作品の制作にあたって、「苦吟」という詩語に伴なう特有のイメージ（――憂苦・勞苦

切迫感・モノマニアックな耽溺・等——を避けようとする、何らかの意識がそこにはたらいた為。

こうした大雑把な捉え方では、十分な説明とまではゆかない。しかし、少なくともここに、へ苦吟の、苦のイメージから離れてゆこうとする、へ苦吟の離れとでも言うべき傾向を想定してみることは可能であろう。

「苦吟」という表現を避け、「閑吟」という言葉に拠ろうとする選択行為の背後には、(常にそうであるとは限らないにせよ)「苦吟」特有のイメージから離れて、前節で見たような「閑吟」的なイメージへと近づこうとする姿勢——より具体的に言うならば、詩文学を閑静な楽しみとして、或いは官事にたずさわらない(従って「閑」である)隠士・処士の高雅なたしなみの一つとして、精神的なゆとりの中において受け止めようとする姿勢——が存在する筈である。このバランスのとれたノーマルな文学的姿勢ないしは自覚は、へ苦吟の傾向の最も尖鋭な部分に見られる、あの憂苦・労苦に満ちたモノマニアックな耽溺とは、ちやうど正反対の対比を見せる。とすれば、私達はこれをへ苦吟の対極に置いて、へ閑吟特有の文学態度と見做してみる事が出来よう。つまり、詩文学を、憂苦・労苦と共にある、全霊を抛って没入すべき対象とするのがへ苦吟の文学態度であるとすれば、それとは逆に、むしろ余裕ある態度で自己の内面における詩文学の位置を見定めつつ詩作へと傾注してゆくのが、へ閑吟の本質を貫く文学態度であると考えられるのである。

なお、念のため付け加えておくと、ここに抽出したへ閑吟の文学態度とは、へ閑吟の傾向が持つ特性を最も純粹な形でつきつめていった所に成立する、抽象的な典型概念に他ならない。

また、へ閑吟∨との比較の対象として右に示したへ苦吟∨的文学態度も、同様にそうした典型的性格のものである。従って、そのいずれかの文学態度が、常に明確な自覚意識を伴って詩人のうちに存在していたという訳ではない。現実にはむしろ、それぞれの文学態度はもつと曖昧な形で詩人の内に存在しており、両様の態度が一人の詩人に現われることも当然あり得る、と考えるのが妥当であろう。要するに、私が考えているへ閑吟∨的文学態度・へ苦吟∨的文学態度といふこの両極的な概念は、中晩唐期のへ詩∨的風潮を構造的に捉えてゆく場を設定する為の基準であつて、この時期の詩人達の文学態度をそのどちらかに帰属させて截然と区分しようとする為のものではない。

ところで、以上のようにして抽出されたへ閑吟∨的文学態度の、へ苦吟∨とは対照的な性格（ないしはへ苦吟∨を避けようとする性格）は、注目に値いする。というのは、このへ閑吟∨的文学態度が持つ、バランスのとれたノーマルな姿勢ないし自覚は、詩人の詩文学への没入がへ苦吟∨的な方向に極端に尖鋭化してゆくのを防ぐ、いわば歯止め的な役割を果しており、さらにはそれが、中晩唐期のへ詩∨的風潮の中で、或る重要な意味を持つていると考えられるからである。

こうした問題を考える上での一つの好例として、私はここで、晩唐の詩人陸龜蒙を挙げてみることにしたい。

「閑吟」の「苦吟」的な意味内容での用例中にも作品を引用したこの詩人は、江南の甫里に隠居し、茶を娛しみ詩を賦して優游自適の生活を送った人物である。彼の詩には、そうした生活およびそれをとりまく山水・鳥獸・器物等を歌った作品、或いは親しい友人との唱和の類が多いが、その詩風を『唐才子傳』は次のように述べている。



苦吟、極清麗。

(卷八)

ここでいう「苦吟」とは、同じ『唐才子傳』の卷八、司空圖の条に見える、「性苦吟、舉筆緣興、幾千萬篇……」の用例と等しく、単に詩文学に対する没頭癖・愛好癖を指すものと理解されるべきであろう。彼には、伝記・作品いずれの面から眺めても閑適的な性格が強く、賈島あるいは孟郊といったタイプのへ苦吟✓が持つ、憂苦・勞苦・モノマニアックな耽溺等の諸特徴は見受けられない。たとえば、彼の自伝である「甫里先生傳」を見ても、「先生平居以文章自怡、雖幽憂疾痛中、落然無旬日生計、未嘗暫輟、」というように、詩文への没頭は、「憂」「疾」とは対立的な「怡しみ」として自覚されている。また、そうした没頭も決してモノマニアックな印象を与えず、「先生性野逸無羈檢、好讀古人書……」あるいは「先生嗜茶菴、置小園於顧渚山下……」といった記事の間にはさまって、隱士・処士が持つ一つの高雅なたしなみとしての穩やかさを保っている。

さて、このように、詩文学に対する強い没頭癖・愛好癖を持ちながらも、へ閑吟✓的な姿勢を終始崩すことのなかった彼のうちには、へ苦吟✓的な文学態度の極端な性向に対する、或る批判的な意識が存在した様である。「書李賀小傳後」と題する文章を見てみよう。彼はまず、李賀・孟郊の二人の詩人のモノマニアックな詩作への耽溺を紹介する。「玉溪生傳、李賀字長吉、常時旦日出遊、從小奚奴、騎馱驢、背一古破錦囊、遇有所得、即書投囊中、暮歸足成其文。」「孟東野、貞元中以前秀才家貧受溧陽尉。溧陽昔爲平陵、縣南五里有投金瀨、瀨南八里許道東有故平陵

城……大抵幽邃岑寂、氣候古澹可喜、除里民樵罽外無入者。東野得之志歸、或比日、或間日、坐於積水之傍、苦吟到日西而還。爾後衰衰去、曹務多廢。令季操卞急、不佳東野之爲、立自上府、請以假尉代東野、分其俸以給之。東野竟以窮去。』  
そしてその後、彼は次のような言葉で一文を締め括っている。

吾聞淫敗漁者、謂之暴天物。天物既不可暴、又可抉摘刻削露其情狀乎。使自萌卵至於  
稿死、不能隱伏、天能不致罰耶。長吉夭、東野窮、玉溪生官不掛朝簪而死。正坐是哉、  
正坐是哉。

つまり陸龜蒙においては、詩作への度を過ぎた惑溺は、天物を暴くにも等しい危険な行為に他ならなかつたのであり、私達はここに、彼がへ苦吟✓的傾向に対して投げかけた批判、そうした傾向に対して抱いた一種の畏怖、或いは彼におけるへ閑吟✓的文学態度の思想的な根拠、等々を探ることが出来る。詩文学に対する陸龜蒙の態度は、先にも述べたように、一面ではへ苦吟✓と共通する没頭癖・愛好癖を持つていた。しかし反面そこには、度を過ぎたへ苦吟✓的傾向に対する批判・自己規制といった、極めて冷静な、落ち着きと余裕を持った自覚が備わつてもいたのである。

ところで、晩唐詩人のこのような落ち着きと余裕を備えた文学態度に接する時、私はそれを、宋代人の安定感に満ちた詩精神と結び合わせてみたい誘惑に駆られる。

中晩唐期、孟郊・賈島・李賀・李商隱らを筆頭とする、いわゆる苦吟派の詩人達の詩文学への

惑溺は、単なる愛好癖の域を逸脱して、一種芸術至上主義的な倒錯性さえ覗かせる。己が全生涯全精力を詩文学の内に押し込めた感のある彼等のへ苦吟は、この時期の詩文学を彩る一つの特色ともなっているが、しかし、こうした風潮は後の宋代にそのまま受け継がれていった訳ではない。一般的に言って宋代の詩文学は、へ苦吟に満ちた没頭的な詩作態度に支えられることはあつても、( ) そうしたモノマニアックな憑かれた様相を呈することは稀であり、むしろ教養主義的とも言ふべき形で、士大夫精神の内部に、或る安定した確かな位置を与えられて収まっているように感じられる。(たとえば、吉川幸次郎氏が岩波中国詩人選集『宋詩概説』において述べられる宋詩の性質——叙述性・生活への密着・哲学性・平静さの獲得——は、いずれもこの時代の文学意識の、落ち着きを持った安定した性格と結び合うものである。) そして、こうした中晩唐期から宋代にかけての文学態度の変遷を、歴史的な立場から眺めてゆこうとする時、右の陸龜蒙に代表されるへ閑吟的文学態度は、兩者の中間的な位置に浮かび上がって来るように思われるのである。

陸龜蒙の文学態度は、へ苦吟の持つモノマニアックな倒錯・逸脱を押え、詩文学への傾注ないしは没頭を、ノーマルで安定した文学意識の中に組み込んでゆこうとする姿勢を持っている。とすれば、私達はそこに、宋代的な詩精神と何らかの形で結び合う傾向を仮想した上で、中晩唐詩に対する次のような視角を設定してみることも不可能ではないだろう。すなわち、

中晩唐期の詩文学は、へ苦吟という尖鋭で特殊な文学態度を一方で生み出しながらも、同時に他方では、このへ閑吟的文学態度の生成によって、宋代的な安定した詩精神の獲得

にも手を伸ばしつつあった――

――と。(ただ、実のところを言うと、前稿「中晩唐期へ苦吟の覚え書き」の一六〇頁で指摘しておいたように、へ苦吟のうちに、仏教(禪)思想と結びつく傾向が見られ、宋代の詩禪説の先駆としての役割を果たしている。従って、へ閑吟の文学態度のみが宋代的な詩精神へと連なる要素を持つ、と単純に考えるのは正しくない。また、このへ閑吟の文学態度そのものにしても、いきなり無条件に宋代の詩精神に結びつけられる訳ではなく、その歴史的性格を明らかにする為には、綿密な分析と実証が要求されること言うまでもない。要するに、この辺の複雑な事情については、今後の研究成果を待った上で、さらに検討を積み重ねてゆかなければならぬのであるが、問題に対する私の基本的な考えをここで予め明示しておくとするれば、中晩唐期のへ詩の風潮自体のうちにも、宋代的な詩精神の生誕に関わり合う、何らかの動向が見出されるのではないか――、ということになる。)

このような唐宋の文学史に関わる問題を正確に跡付けてゆく為には、何よりも先ず、中晩唐期から宋初にかけての詩人達に対する、綿密かつ総合的な研究が必須条件となる。そうした研究には、恐らく一個人の能力を遙かに超えた知的堆積と時間とが要請されようが、しかし、今私が飛躍は敢えて承知の上でここに描いてみた、粗雑極まりない図式によっても、中晩唐期のへ閑吟の傾向が持つ文学史的な面での重要性は、或る程度想像できるのではないだろうか。従来、中晩唐詩というと専らへ苦吟のみが取り沙汰されることが多い。だが、中晩唐期へ苦吟の風潮の

消長を考ふる為にも、またこの時期の八詩∨的風潮の歴史的な展開を辿り、宋代的な詩精神への移行の契機を探る為にも、一方の八閑吟∨に対する分析、検討は、決して忘れられてはならない事柄なのである。

## Ⅳ

以上私は、「閑吟」という言葉の使用情況・意味内容について検討し、そこに浮かび上がって来る文学史的な問題についても、若干の論及を試みてみた。問題点の所在を手探りしてみた程度の内容では、到底満足なものとは言えないが、ただ、中晚唐詩において八閑吟∨的風潮・八閑吟∨的文学態度が占める重要性については、おぼろげながらも指摘することが出来た様に思う。

残された問題は数多く、しかも、そのいずれもが容易な解答を拒む難題である。しかし、八苦吟∨と八閑吟∨というこの両極的な構図の設定が、中晚唐期の文学思潮を捉え直す上で或る程度の有効性を持つと考えられる以上、私は今後、たとえ僅かずつではあっても、こうした視座からの考察を持続させていってみたいと考えている。